

## [課程—2]

### 審査の結果の要旨

氏名 後藤 悌

本研究は、非小細胞肺癌において、一次治療の薬剤、治療効果が、ドセタキセルによる二次治療に寄与するかどうかを調べ、二次治療の効果予測因子を探索した。なかでも、一次化学療法レジメン、とくに同じタキサン系であるパクリタキセル使用の有無が、ドセタキセル治療に影響を及ぼすかどうかを解析するため、一次化学療法レジメンをパクリタキセル治療歴の有無で分類することにより、下記の結果を得ている。

1. パクリタキセル治療歴の有無によって、二次治療としてのドセタキセルの効果は、腫瘍縮小効果、疾患制御割合、生存期間において、有意差がなかった。ドセタキセルと作用機序を同じくするパクリタキセルを使用している場合、ドセタキセル治療は有効である。
2. ドセタキセルと同様に、微小管阻害作用のあるビンカアルカロイドとパクリタキセルの使用歴の有無で分類しても、ドセタキセル治療の効果には有意差がなかった。ビンカアルカロイド、パクリタキセル、その他の治療群と比較した際も、同じであった。ビンカアルカロイド、パクリタキセルとドセタキセルは部分交差耐性であると考えられる。
3. 一次化学療法にかかわる因子の中で、後続するドセタキセル治療の腫瘍縮小の効果予測因子であったのは、腫瘍縮小効果だけであり、レジメンは効果予測因子ではなかった。ドセタキセル開始後の全生存時間は、一次化学療法レジメンや効果の影響を受けなかった。

以上から、非小細胞肺癌に対するドセタキセルの二次治療は、一次化学療法がパクリタキセルであっても、他の薬剤であったときと同等の効果が得られること、一次化学療法で腫瘍縮小の効果があつたことは、ドセタキセル治療の腫瘍縮小の効果予測因子となる可能性が示唆された。今後は、各患者に、どの薬剤が有効であるかという、治療の個別化がより重要となってくる。本研究の結果は、ドセタキセル治療を選択する指標となり、後ろ向きではあるが、日常臨床の疑問に対する解答の一つを提示できた